御陵衣祭を拝観して

徳丸節子

地御前神社の御陵衣祭は、毎年、旧暦の五月五日、端午の節句の日に執り行われています。

私は、この度、初めてお祭り（御陵衣祭）を拝観致しまして、古式ゆかしい諸々の神事に間近に接することが出来て、歴史と伝統の素晴らしさに、深い感動を承けました。この感動を出来るものなら、皆さんにお伝えしたいと、このお祭りの情景を素描してみました。

昔は、このお祭りの日は、小学校も午後はお休みにして、お祭りに参加させたものだったと云います。

今年は、六月四日が祭りの当日と聞き、私は少し早めに神社へと向かいました。

幸い空は、はれやかに晴れ渡り、社殿を包む紅白の幕が張りめぐらされて、和やかな雰囲気の中にも、緊張感が漂っていました。

すでに厳島神社の神官の方々の姿が見え、流鏑馬（ヤブサメ）の大役を担った神馬も境内に待機しており、周囲には参詣者が集まっていました。

拝殿には、敷物が用意されていて、やがて午後二時近くになり、次々と、拝殿に上がりましたが、広い拝殿が見る見る中に満席になりました。遠くからの参詣者も多いといわれています。

着席して、周囲を見回すと、左側に、雅楽演奏用の楽器が並び、玉串用の榊が用意されていました。竹筒には、菖蒲と蓬（ショウブとヨモギ）が供えてあり、端午の節句という季節感を表現していました。

大勢の参詣者にも関わらず、人々は私語ひとつなく神事の開始を待ちました。

赤い鉢巻きの男の赤ちゃんを抱いた母親のうれしそうな笑顔がひときわ印象的で、みんな笑顔で赤ちゃんの仕種を見やっていました。

誰となく、赤ちゃんが初節句を迎えたお子さんであろうとの思いからであろうか、次々と席を譲り合い、その親子が前列に行けるように計らっていました。

静寂の中に、開式を迎え、いっそう厳かな空気が、瞬間的に拝殿全体を包みました。

やがて雅楽が奏せられ神事が始まりました。

楽人は十二人で二列に座られ、笛・太鼓・鉦鼓・笙（ショウ）・篳（ヒチリキ）で奏でる雅楽は雅で美しく、その古式ゆかしき音色は、心の洗われる思いで、その音調はまわり一帯に響きわたりました。

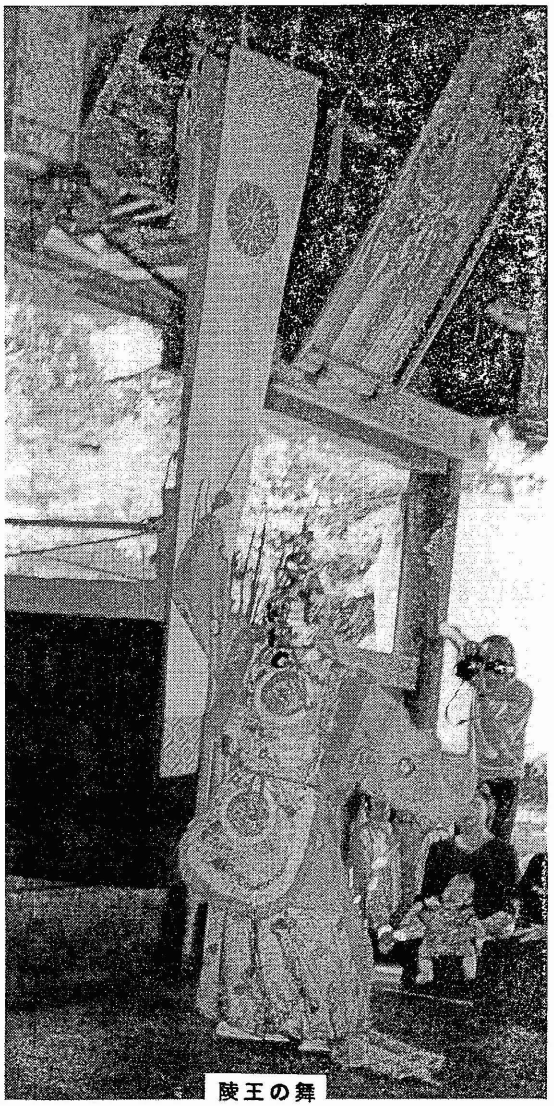
その間、宮司さんは、何度か客人殿（マロウド）と、大宮本殿の間を行き来され、参詣者の見守る中を、祝詞（ノリト）があげられ、厳かな儀式が進行いたしました。

先ず、東側の客人殿の方から、神官の方々が大床（オオユカ）に置かれた諸々のお供物を丁寧に手渡しの上、運ばれた後、拝礼され、それらがすべて流れるように進行し、恭しく感じられます。

次は、西側の大宮本殿の方へと移られて、客人殿と　同様な流れで進みました。

参拝者一同は、息をのんだように静粛に、この神事を見つめていました。

社の装いは、白地に社の紋章を染めあげた垂幕を社の外側全部に巻き、いやが上にも厳粛な雰囲気を盛り上げています。白地に朱の菊花紋、朱色の地に菊花紋のある幡（バン）のぼり）がひるがえり、お祭りらしい華やいだ彩りが添えてあります。拝殿の鴨居には、多くの絵馬が掲げられて、中でも陵王の舞楽絵馬は美しく、人目をひいています。



陵王の舞

■陵王の舞